

遥かなる夢を追い求めて



阪神淡路大震災の鎮魂植樹に集まった地元子ども達と夢の会のメンバー



広見川夢の会 事務局長
葛川 熊夫
(鬼北町)

清流「四万十川」の支流として鬼北の田園風景を縫って流れる「広見川」。この川は地域住民にとってまさに命の川であり、そのままの姿を次代へ伝えることが我々の使命である。

私達「夢の会」は、昨年11月に開催された「きれいな水と緑を取り戻す全国大会（福岡市）」において、環境大臣表彰となる「水環境保全活動・自然環境保全活動等功労者」最優秀に輝く栄に浴した。

受賞できたのは、発足以来、会長としてずっと会を牽引してこられた元玉川大 学教授酒井哲夫先生の指導の賜物である。先生は昨年春から病に伏され、今年1月に永眠されたのだが、授賞式には一時的に回復され出席が可能となり、私達と共に喜びを分かち合うことができたことは誠に奇跡であった。

さて今年、愛媛県で開催される「地域づくり団体全国研修交流会」の分科会を私達もお手伝いすることになった。「夢の会」の詳細は分科会での発表に預

けるとし、会の成り立ちとその取り組みについて簡単に紹介したい。

「夢の会」の前身

22年前、河川改修工事や生活排水等によって水質が悪化し、下流の四万十川への影響が懸念され始めた「広見川」。その変貌ぶりに気付いた地元の有志によって設立されたのが「広見川をまもる会」だった。以後「広見川は我々の生命の川。この川の自然と恵みを未来に残し伝えなければならぬ。」という目標を掲げ、行政や関係機関に対し、川の自然破壊について提言を行う等の活動が始まった。

「まもる会」から「夢の会」へ

活動開始から10年が経過した平成8年。会の依頼により、東京から「ふるさと三島」に帰っておられた酒井先生が「広見川の夢」と題して講演を行った。

その講演で先生は「すっかり変わってしまった」と思っていた広見川だったが、今年の帰郷では、カジカガエルの鳴き声が聞こえ、ゲンジホタルが飛ぶのも見えた。自然は少しずつ甦っている。これからの人生は、広見川再生にかけよう心と誓った」と話された。

活動も10年目となり「今後は行政への



夢の会が主催する「広見川上り駅伝大会」

「一言だけでなく、住民と行政が幅広く協力し合う活動が必要だ」と考えていた「まもる会」では、この講演を契機にその思いを酒井先生に託すことで一致。先生の快諾を受け「まもる会」の意思を継ぐ形で「夢の会」が第一歩を踏み出した。

「夢の会」の「夢」と「活動」

「広見川を世界で一番美しい母なる川にしよう」それが「夢の会」の夢。 Mottoは「目標に向かって、夢はどこまでも高く、活動は地道にコツコツと！」であ

る。発足以来、30人の会員が次のような活動を続けてきた。

まず主催事業としては、

① 春の河岸の彩りとミツバチの蜜資源の確保を目的とした「広見川沿岸へのナタネやレンゲの播種」

② ホタルが乱舞する清流復活に向けた「ホタルの里づくり事業」

③ 悠々と泳ぐ鯉の姿を広見川の名物にすると共に、子供達に生命の大切さを教えた」と始めた「稚鯉の放流」

④ 地域住民への自然や地球環境についての啓発を目的とした「講演会の開催」

⑤ 清流のアピールと自然環境保全の啓発を目的とした「広見川上り駅伝大会」

また、地元他団体との共同事業として、「ケヤキ苗の植樹」や「広見川灯ろう流し」、「安森洞そうめん流しの運営協力」などを続けるほか、昨年からは、愛媛大学農学部への要請を受け、町内児童を対象とした広見川の水質調査や生物調査などを行う「環境学習会」にも協力している。

地域づくり団体全国研修交流会の 地元開催にむけて

先月、新会長も決まり、新生「夢の会」がスタートした。酒井先生が生きておられたなら、当地で開催となるこの研修交



平成8年～18年までの11年間続いた「稚鯉の放流」

流会もさぞかし喜ばれ、実のある分科会になるよう一生懸命協力されたことであろう。私達もまた、この催しも酒井先生の遺産なのだとの思いである。

分科会での「夢の会」の活動報告が参加者の皆さんの活動の一助になるよう、また天国の先生に笑われることのないよう、会員一丸となって準備を進めていきたい。